

現場主義からの脱却

——労働キャンプ運動の視点——

荏 開 津 喜 生

戦後日本の思想の主流は、戦争体験を根拠とした、平和と民主主義の追求と確立であるといわれる。15年戦争の歴史的、思想的総括がなされる間もなく出発した戦後は、すでに20数年間を経て今日、再び戦争への危機感が私達をとらえはじめている。

戦争体験から、戦争責任の追求、さらに戦後責任の追求まで一本の筋を通しながらも、一つの思想的動乱の時期としてあったこの20数年間、社会はもう一つの足で歩み、60年日米安全保障条約改定を中心において多様に屈折しながら、70年安保改定をひかえて、再度戦後日本の思想的な位置づけを問われ始めている。

『聞けわだつみの声』『戦没農民兵士の手紙』等々の戦没者の記録を集める仕事とか、戦争責任論、15年戦争論など数々の戦争を追求する仕事、そして、原水爆禁止運動等、15年戦争の体験から戦争に對置する平和を追求する仕事、運動は数多くなされている。しかし、一方でそういう拡がりをみせながら、他方ではあくまでも戦争体験に固執するという知識人はだんだんと少数派になりつつある。そして、現在、多大な犠牲の上にたてられた平和な社会と民主主義はうやむやのうちにゆきづまってゆき、知識

人の思想的、運動的停滞と荒廃がある。

それに対して、反日共系全学連を中心とするいわゆる新左翼運動は、政治的、思想的ラディカルな路線をうち出すことによって、戦中派知識人、旧左翼をのりこえようとしている。

この現象は何故なのか。戦争追体験者としての我々にとっての“平和・民主主義・自由”とは何なのか。戦争体験者の仕事を評価しながら、さらに運動的にのりこえてゆく方向はラディカルな運動でしかないのか。

それを、私自身の参加するフレンズ国際ワークキャンプ関西委員会(FIWC関西)とそれが建設したらいい回復者社会復帰センターの看板を掲げる“交流の家”運動の中に見ながら一つの視点を出してゆこうと思う。

第一章において、今までの運動、とくに知識人の運動、いわゆる平和運動を見ながらその欠陥を探り、第二章において、FIWC関西等を例にとりながらこれからの運動の視点を求めていく。

第一章

戦争はいろいろな思い出を残した。戦争体験にしても原爆体験にしても、その思い出は各々異つたものである。しかし、戦後20年、一応の社会的安定期にある今日、複雑である思い出は、戦争体験あるいは被爆体験をあらわす具体的なものを見る時、ある抽象的な言葉によつて単純化され、さらにその表現として同一化されてゆく傾向にあるのではないかと思われる。広島の平和公園にある、永遠に燃え続ける「平和の火」を見ると、アメリカのアリントン墓地で燃えている「ケネディの墓火」を思い出すことのできる気分が、私だけでなくそこを訪れる人々の内にあるのではないのか。すなわち、あるものを象徴するものが、同じ形態でもつて存在するならばそれを受けとめる側において、その意味さえも同一化する傾向がある。これが慣れであり慣れに対する人間の弱さを誰もが感じながらもっと新しい面を表現するという積極的な意味を、誰が象徴にもたし得たであろうか。今までのあらゆる知識人の起した運動の欠陥を見い出すことなくしては、『戦後20数年に、我々がなし得た唯一の成果は、もし権力の側にある人達が反動的な態度をとつた場合、何らかのかたちで大衆は反応するようにになった、ということである。』というような表現で代表される知識人の消極的な運動でしか展開され得ないこととなる。運

動の流れを、「勝ちとつてゆく方向」と「守つてゆく方向」とに大別することが許されるならば、「守つてゆく」運動が、今日ラディカルな表現でもつてなされてきつつある。そこに、知識人達の運動に不満を持ちながらも、あまりにも安易な「運動の場」の選択と、「運動の根拠」の見出し方を見ることができるようになる。

戦争の思想的な遺産は、主に知識人によつて追求されてきた。『はるかなる山河に』『雲流れるはてに』『聞けわたつみの声』『戦没農民兵士の手紙』を代表とする兵士達の記録、数々の戦争文学、あるいは一人の原爆少女によつて残された原爆ドームや記念館資料館等、具体的な形でもつて戦後に生きる人間に訴えかけてきたし、戦争責任の追求、戦後責任の追求等、戦争体験を決つてマイナスにはしなうとする意志が、戦後日本の思想の主流を、平和と民主主義の追求、確立にあらしめた。が、60年安保を契機になしくず的に民主主義を空洞化してきている権力と、一方に於ては、原水禁運動が分裂し、文化サークルが混迷し、政治運動が多数の派閥によつて分裂しているのを見ると、戦争体験者の地道な仕事を誰が正當に評価してきたのか、戦争を体験していない我々がそれをどのようにに継承してきたのかを考えざるを得ない。この二つをみるならば、これからの運動は評価と継承の部分に目を向けなくてはならない。それが、慣れに対して、新しい意味をぶつけ出すことであり、「勝ちとつてゆく方向」と「守つてゆ

く方向」とを両立させることではないだろうか。

2

——安らかにねむって下さい。この誤ちは二度と繰り返えしませんから。

——再びわだつみの悲劇をくり返えすな。若い魂の苦しみの上にうちたてられた平和を絶対に守らねばならない。

——自分達の身近な人々の戦争体験の中から戦争への反省を学びとる。次第に失なわれてゆきつつある記録を集めることによって戦争そしてその惨禍を考えてゆくことができるのではないだろうか。

以上は、平和公園にある碑に書かれた有名な言葉を『聞けわだつみの声』出版にあたっての言葉の一部、そして『戦没農民兵士の手紙』のあとがきの引用である。これらの言葉の中に、共通した点をみつけ出すことができる。二度と戦争はしないという態度であり誓いである。戦争は悲惨なものである、という実感が、これらの言葉の中にはある。安田武の『たまたま自分の横にいた、そして、わずか10センチしか離れていなかった戦友に弾があたって死んだ』という実感は、白鳥邦夫の特攻隊の生き残りとしての実感は戦争を体験していない我々にはない。その実感が戦争体験者のいわゆる原点となっている。彼らはその原点から出発し、いろんな運動を形成し、戦後の60年安保を中心とした社会的屈折を体験しながら、自らの運動の限界を「戦争体験」というわくの中に

見出してゆく。しかし、その原点からでている糸は自ら断ち切ることでできないものであった。

『再読』聞けわだつみの声』の中で安田武は、『わだつみの声』が多くの人達に忘れられてゆく現実を「不当だとは思わない」と言いながら、「けれども、私達（わだつみの世代）の場合はそれでよいのだろうか。」と、自分を含めた戦中派の世代に再度問いかけている。少なくとも『聞けわだつみの声』の作者達を学友としても、自らは偶然の運命によって辛うじて生き残ったわだつみの世代の自分達、「私達が、この書物を忘れることは私達自らの生命をかけた体験を忘れること、こんなにちに生き残ったことの意味を忘れることだ。」戦争体験を「思い出」として自分の片隅におしこめてしまっている多くの、戦後民主主義の指導者たる知識人に、安田武は問いかけている。

安田武にとっては、戦争体験を出発点として、戦後の生き方として同じ道を何度も何度も行き来しなければならなかった。その一本の道は、わだつみの世代としての必然の道であった。が一方、戦争体験を「思い出」としてしまった多くの知識人は、全く方向の異った何本かの道を何の矛盾も感ずることなく歩き出すことができた。社会的な屈折点で、自らの運動、思想が敗北した時、また再び思い出としてある戦争体験を片目でみながら、又異った運動をすることができた。あるいは、運動者の立場から研究者の立場にあつまり返ることができた。その点に安田武はうらみをこめ

て批判するのである。

安田武にとつての戦後に生きる根拠は『運命の偶然によつてたまたま生き残った。』という実感でしかない。それが彼の仕事、運動の根拠である。一方、多くの知識人達はその根拠を「俺も戦争体験者だ」という言葉で表面をとりつくりながら、実際はもっと抽象的な感じに、「権力によつてまきこまれたのだどうしようもなかった」という形で、権力、体制という言葉の中にかくしてしまふ。日本共産党を中心とするマルキスト達は、十八年の獄中生活を言うことによつて、戦後の運動の敗北を決つて認めようとせず、挫折すらしない。そこに彼等の運動が、状況運動にせよ非状況運動にせよ、実りのあるものとせず、彼等の言う「自由、平和、民主主義」が多大な犠牲の上にたてられながらも「外から与えられたもの」としかとらえられず、地につかないまま、なしくずし的に権力によつてくつがえさえていく現実がある。それ故に、逆に彼等が、戦後世代の安易な『運動の場』の撰択と『根拠の見出し方』を保証することとなり、一層、戦後の数多くの運動が地に着かなくなつたといえよう。

3

運動とは何か。その核は、参加する個々人が、「自分の生きる根拠」を徹底的に追求することにある。運動の本質が、個人の実感＝根拠であるがゆえに、『運動の場』はそのための媒介としてはじめて位置づけられる。どんな運動にせよ、その運動体のもつ

性質、例えば反体制的だとか、あるいは共産主義社会をつくるとか、よりよき社会だとかユートピア、共同体などという言葉は、あくまでもその運動が進んでいくだろう方向を指すものにすぎない。"体制はまさに自分自身でしかなく、現体制は自分のとらえざるを得ない対象でしかない。個人は、自分から社会、自己を通じて自分に返る一つの変革の方向と、逆に自分↓自己↓社会↓自分というもう一つの方法をもつと考えられる。このどちらかのサイクルで生きる時、自分の根拠と進むべき方向の性質を知ることができ、他の個人と一緒に運動体を組んでいく意味があると考え

る。

「——知識人が、一つの運動にコミットするさいに、彼自身の個人的な志が直接彼の協同したいと願う対象の志につながるまでに様々なクッションがはさまれていて、ついには自分の個人的志のゆくえがわからなくなってしまうという様なことがたびたびありました。また、自分が一体どこまでコミットしているのか、自分の期待はどこまで達せられ自分はどこまで責任を負っているのか、それが不分明になつてしまうこともたびたび体験させられたことです。」"ヒロシマノート"のエピローグで大江健三郎はこう書いている。この様な内面での矛盾を感じながら、対象にぶつかることによつて運動を実体化させてゆく時、そこに問題になるのがその方法論である。何をどうするのか。何をするのがその場合意味をもつか。という問いによつて運動を位置づける必要が

ある。

岩手県国民健康保健連合会で『岩手の保健』という小さな雑誌を編集している大牟羅良は、その著書『ものいわぬ農民』の中で、「——私は農村の姿を、現実生きてゐる人々のくらしの声でお伝えするようにつとめたのです。（中略）働く農民と労働者、それはいろいろな生活条件の違いから、結びつきがなければか反感めいたものすらあるような気があるのです。しかし、歴史は大衆がつくらなければならぬし、政治は大衆のものでなければならぬはずです。だとすれば、働く農民と都市の労働者を結びつけることが何よりも増して重要なことではないでしょうか。」

都会の人と農民は如何にすれば結ばれるか（中略）、それにはお互いが、くらしの中の喜びや悲しみ、望みやなげき、それらを自分自身の言葉で、自分自身の筆で記し、それをお互いに交流することが大事ではないかと思ひます。（後略）」と書いてゐる。農民にべつたりの態度は少々感じられるが、この文章の中で大牟羅良は、自分自身の運動の場とその方法を表らわしている。復員後、故郷の岩手県にもどり、生活の為に山村を行商してゐるいた彼にとって『ものいわぬ農民』達の苦しみや喜びは彼自身のものであった。それ故に岩手県の農村が大牟羅良にとって執着せざるを得ない場であり、復員後の生活に於ける実感が今日を支える欠かせない根拠であつた。こうした実感を大切にすること、そして実感を大切にする人々をしだいに「べつたり」にせざるを得な

つた多くの知識人達、彼等の運動はこれ故に荒廃せざるをえない。

「彼等の存在と呼びかけの聲が、かくも抜きさしならぬものである以上、われわれの誰の内部で、広島なるものがすっかり完結してしまふだろう。」（ヒロシマノート）と言う中に、日本原水爆被害者団体協議会の資料保存の運動に対して側面援助をおこなう集いを提唱し、いくつかの分裂をひきおこしながら一向に広島的なるものに手をつけようとしなかつた原水爆禁大会の政治至上主義者達から離れてゆかざるを得なかつた大江健三郎をみるとができる。「文学」という場をもち、全く同じ場から運動への拡がりを大江健三郎は掴むことができた。

大江健三郎の発想があり、大牟羅良の方法があり、「自分の足もとだけを探り記録する」規約も何もない山脈会の白鳥邦夫があり、その上に『70年への遺書』を書いて自らを結びつづけた糸を自ら断ち切ることを表明した安田武がある。この戦中派の流れをみ、そして彼等の仕事を踏えた上でこれからの運動は位置づけられると考える。

4

「8月15日が夫の命日である。」（私のお婆の口ぐせ、彼女は戦争未亡人である。三人の子供をかかえて、農家の嫁として家を守ってきた。私が戦争を語るときたえず彼女の顔が浮んでくる。）そして『あの人は帰って来なかつた』の中にみられるように、勿角、生活のためには何もかも忘れて働かざるをえなかつた戦争未

亡人達、そして『戦没農民兵士の手紙』『アンケート 野良着の

声』にみられる様に、軍隊は楽なところで、それより家の方が心配だった農民兵士、仕事の休みに楽しげに戦争中のことを語る大衆。一方で、戦争体験に固執し続けるか、それに触れられるのを嫌う知識人達。この二つ、大衆と知識人を結びつけること、これが、今までの多くの運動に欠けていたか、もしくは、その方法を誤っていたと思われる。すなわち、大牟羅良が農民の声を活字にするのに努力しているとき誰が都会の労働者の声を活字にするのに一生懸命になったのか、ということである。『戦没農民兵士の手紙』の書感に「悪しき現場主義だ」と批判するのがあつたが、まさにその批判者こそ、農村、スラム、部落、朝鮮人等、そういう日本の貧困に同情とかあわれみとかしか感じない実感主義者であり、「悪しき現場主義者」だと言える。そこに多くの知識人の大衆感があり、自らの体験に目を向けないで、運動の崩壊の原因を自らつくりながら、それを外に見出そうとしなかった知識人がいる。

藤田省三が「日本の実感主義は実感そのものに疑いを持たない実感主義だ」という言葉はまさに今までの運動の欠陥をついている。

以上のことをふまえて、次章では新しい運動への視点を、フレンジ国際ワークキャンプ(FIWC)関西委員会の建設した、らい回復者社会復帰セミナーセンター¹交流の家²の運動を例にひ

きながら考えてゆく。

第二章

1

安田武の原点からでている切りきれない糸すなわちわくを切り離す作業は、戦争を体験していかない若い世代の受けもつべきものである。彼が多くの影響を与えたわだつみ会は逆に彼の原点に埋没してゆく傾向にあつた。またべ平連の若い世代は、戦争体験者にそのわくを運動に於て断ち切ることを要求しながら、自らの運動の理論と根拠を出すことなく、政治至上(状況運動)の運動にそつた形で急進化してきている。

自らの根拠を自らの言葉で語る。このことが自分の運動の出発点である。この原理を理解しながら、運動の中にとり込む努力をしなかつた多くの運動は分裂するか、敗北してきた。この原理と運動の場を決めること、対象を決めること。この作業ののちに、谷川雁の言う『生産力理論型とユートピア型との接点に運動を形成してゆく』ことを理解できる。

2

政治運動に対置するならば、社会運動に位置するFIWC関西の建てた、らい回復者社会復帰セミナーセンター交流の家は、らい園の中ではない、奈良という場所に建てられたことに一つの意

味を持っている。(交流の家はらい病の回復者が普通の旅館に宿泊できなかったばかりか、キリスト教の精神にのつったYMC Aにさえ宿泊を拒否されたという事実を聞いた学生が、誰でも自由にとまれる宿泊所を建てようと奈良に建設したものである。その建設の過程で、FIWCは、らい問題をとりあげて、差別の本質を追求してきた。)

今まで「らいはらい園に居る」という考えが一般的に支配してきた。支配者がらい園にらい者をとじこめてしまった。その考え方が今もぬけきらないでゆきわたっている。そしてらい問題をとらえた多くの運動が、園の中で奉仕作業をするとか、らい者のためにという救らいの募金することではしかなかった。FIWC関西委員会が、交流の家を建設する要因には、そしてそれが大きな意味を持つこととなったことには非常な偶然性がある。まず、ワークキャンプであったことと、たまたま、宿泊拒否の事実を聞いたということ。そして時期的に言えば、60年安保の挫折感が学生をとりまいていた頃であり、政治的な挫折から、日本人の中に、土着の方向に進まねばという考え方を持っていた。そして、ワークキャンプの中でも、今までの施設回りではおもしろくないという考え方がでてきていた。建設用地も、施設回りの頃のつながりで大倭教という宗教法人の土地を借りる事ができた。こういう偶然性によって、FIWC関西は新しい方向をとることとなった。

そして、らいを対象として運動をすすめる中で、その根拠を、

差別は自らの中にある、すなわち「内なるらい」という言葉を発見した時、初めてらい者と自分達のいわゆる「連帯」の関係を持つことができた。そして、交流の家が建った段階に、らい者にとつての現場はらい園にあり、非らい者にとつての現場は決してらい園の中にあるのではない、むしろ外にひき出すことに於て運動をなすべきであるという視点を持ちえたと思う。この視点をもっと外の運動にあてはめることによって、その意味を探りたい。同様の視点を、原爆を対象とした社会運動にあてはめることが可能である。原爆Ⅱ広島・長崎という考えは資料としてのドーム、記念館・資料館にある感情を外部から注入することによってその意味を変えてしまった。(第一章、広島火の例) あらゆる原爆をとりあつかった運動はみな広島・長崎という地を離れることはできなかった。それが結局、「広島的なもの」にとまどいながらも理解することがなかった原因にもなっている。その意味で、現場からの脱出は今までの知識人の運動をのりこえた新しい一つの視点であるだろうと思われる。

常に、戦争体験・らい・原爆被爆に受身の形で構えてこざるを得なかった運動は、現場からの脱出という方向で積極的な立場をとることができる。政治的な運動の場合は全てを普遍的な問題とするからともかく、政治運動ではない、社会運動を行う意味を自分で理解することが必要である。「運動の場」と「運動の根拠」を自らが作り出すことが、すなわち現場からの脱出であらう。し

かし、そういう意図でもって交流の家が建設されてきたのではないことは先にのべた。建設の第一期にあたって地元からの強力な反対を受けたという歴史、それを踏まえて完成した交流の家を見る時、はじめてもちえた視点であった。そして、誰もが権限をもたない、規約もなにもなく、単なる約束によって運動体を組んだ時、それは、新しい方向への視点をもった。

3

「原水爆禁止運動はいつも被爆者救済をスローガンに掲げてきたけれども、実際には看板倒れの傾向がないではなかった。その原因はいろいろあるが、上の方から」救ってやる」という意識がからんでいたことも否定できない。私達は被爆者をまず人間としてみることから出発したい。そういう視点から、原爆が人間に与えた肉体的精神的な被害をとらえることが、被爆者と非被爆者の真の連帯に役立つものと思う。『広島の記事』ではこう書いてある。被爆者を人間としてとらえる ことは一個の被爆者と私という関係を持つことである。原爆を中心において考えるならば「被爆者」と「非被爆者」がいる。非被爆者には精神的な被爆者（例えば原爆パイロットとか、家族を原爆でなくした人達）を別にすれば、「広島にすんでいるもの」「以外の日本にすんでいるもの」「外国人」という三つの別け方ができる。ここでこの四つの立場からの運動がでてくる。端的にいえば、被爆者はおりの会の河本夫妻であり、広島住人は中国新聞の記者であり、

一般的に日本人は大江健三郎であり、他の国の立場は原水禁に参加した外国人達である。川本夫妻の場合は被爆者であり、広島に住んでいるという二つの大きな要素でもって自らの運動は決定されている。問題は非被爆者の運動の中に見出すことが必要である。大江健三郎が『われらの内なる広島』という言葉を書いた時、中国新聞社の記者が、被爆者と非被爆者の真の連帯を求めた時、それは直接的な関係ばかりでなく、いわゆるヒューマニズムをつきつめた、原爆を媒介にした連帯の拡がりまで拡げることができる。

らの場合も同様であった。しかしそこで一つの対象にいくつの立場から運動を設定していった場合、それらの運動の連関はどうなのかということ、他の対象を持つ運動との関係はどうなるのか、その運動が誰に対して何をなし効力を持つのかということが問題になる。

4

現場は当事者の現場と非当事者の現場に分けられる。さらに対象の違いによって無数の現場が存在する。再び、FIWCと交流の家を例にとって進めることによって、現場の意味と前の部分の問題を追求する。

らの当事者にとっての運動の現場は園であると書いた。園を中心として、外に向って厚生省なり非ライ者に向って働きかけることが彼等の運動である。自分はいであるという事実から出発するからである。逆に非らい者は自分はいではないという確信

から出発する。確信であるが故に（もっと説明すれば）「らい」という言葉の中に病気よりも差別の意味をこめる、すなわち差別者ではないという確信であるが故に）内部に向つてと外部に向つての働きかけがでてくる。外部に向つてをみるならば、交流の家は、らい回復者社会復帰セミナーセンターの看板を掲げる以上、回復者の宿泊所なり職業あつせんは重要な仕事である。が運動としてみるならば、この現場は、らい者よりもむしろ非らい者、地元との関係に重きがおかれるべきである。らいはらい園にと考えていた人達にとって、自分達の目の前に堂々と「らい」を表わす建物建ち、らいがそこに寝泊りすることは非常な衝撃であろう。今まで権力によってかくされてきたものを表面に出すことはそこに意味がある。『内なるらい』という言葉への過程を地元の人達、非らい者のものとしてゆく役割を交流の家が持つ。そこを利用する人達への問題提起でもある。

「らいを切実に感じてこなかった多くの人達は、「私はらいを差別したことがない。」と言う。又、政治運動に関わっている人達は「らいなどに対する差別は今の体制、資本主義を倒せばなくなる。」と、差別の根元をなくせばいいと言う。又、驚いたことに、部落問題研究会の人達も、どんな対象にしろ差別は体制変革によってなくなると言っている。「あなたは本当にらいを差別したことがないのでか。」という問いは、らいだけでなく普遍的な問いとしてある。それは自分の内部において常になければならぬ

問いである。体制が変革されても、差別が内なるものである以上それはなくならないからである。この内部と外部に対する問いを力を絶えず保ちながら、らいの現場なり何かの現場と地元をつくり出してゆく方向を交流の家は提示している。

地元の人達にとって、あるいはもっと一般的に人達にとって、交流の家は「第二のらい園」であろう。そしてらい患者でないものが多く出入りする第二のらい園はそれ自体奇異なものであろう。それ故に、現場から脱出しそこに現場をつくる意味があるのである。しかし運動の任い手が変わることによって、現場から脱出したはずの現場は、その新しい任い手達を埋没させてゆくおそれがある。FIWOが『よりよき社会をつくる』というスローガンを持ち、交流の家が『誰でもとまれるところ』という時、現場からの脱出によって拮据えた運動を、共同体とか根拠地という発想におぼれることによって逆に狭めてしまうことがありうる。同じ方向と傾向を持つ運動体の利用が非常に多いという事実がある。それは又、悪しき現場主義への逆戻りであろう。

5

交流の家の完成によってワークサイトを失ったFIWO関西は次のサイトを見つけ出さねばならなくなっている。交流の家を建てる過程の総括を、現場からの脱出という面でもとらえるならば、今までの現場から再び引き出して第二の交流の家を建てる方向がある。原爆の現場としてあった広島、長崎から全く異った地に

原爆の家」を建てること、これが先にあげた、おりづるの会の河本夫妻との連帯できることではないだろうか。その意味は非常に大きい。

さらに問題をすすめるならば、らい者と非らい者あるいは被爆者と非被爆者との関係に於てのみでなく非当事者の関係が追求されねばならない。少なくとも、同じ方向をめざしている運動に対しては批判を持って対することはできるが、全く関係のない人あるいは全く異った方向をめざしている運動に対しての関係はどこにあるのか。そして彼等に対する連帯とは何であるのか。という問題がでてくる。続けてFIWC関西と交流の家を例にあげるならば、「誰でもが利用できる」「誰でもが参加できる」とか、「あなたがFIWC関西なのだ」という発言をする時、全く自分とは相容れることのできない思想の人間に対して宿泊をり参加を許すことができるのか。そこには「連帯」「関係」という言葉の意味を再び問う必要がある。そこではじめて、共産主義社会、共同体とかの言葉をもちないで自分の世界を表現することができるのである。(同じ様な考え方で実際に共同体を組んでいる、山岸会、心境部落、一燈園等、日本には数々の共同体があるが、自分の思想を拡めていこうとする場合、自らが食う、すなわち自立していることで一つの運動の限界をつくってしまったと考える。山岸会を訪れた時その思想に感ずるところがありながらもどうも気になったことは、「文化」がないということである。何か古い農

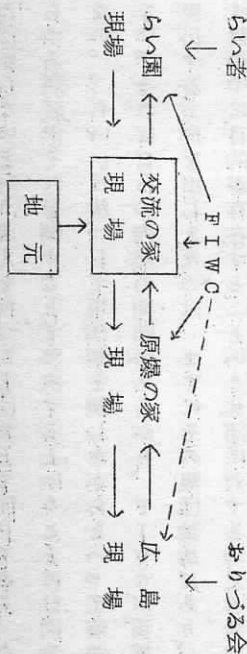
村を思い浮かべることしかできなかった。逆に心境部落に於て、金銭的に余裕があるせいでもあらうが、何か地につかない共同体思想を感じた。)

第三章

1

もう一度整理してみるならば、当事者の実感は非当事者にはないものである。非当事者としての実感を突込むことによって当事者との関係をもつことができる。そこに運動の出發がある。そして当事者の現場から出て自らの現場をつくることによって運動は拡がりを持つ。自らの言葉で「根拠」を語り、自らの運動の「場」を設定することが必要である。そして、その新しい現場は再び運動の停滞の危険性を持っている。つづけて、第二、第三の現場(対象の違いは関係なく)をつくっていくことは意味を持つ。

以上のことを図式化すれば次のような関係としてあらわせる。



結局、自らの現場をつくり、さらにその現場から脱出してゆくとき、その全体としての方向はユートピアとして考えることができる。自らを解放することが重要な視点となるからである。地元との関係は土着という発想自体に非常な意味を持つと考える。

運動体が自らの現場を持ち、自らの方法を見出し一つの方向にありぬ時、誰がその運動を担うのか、という問題には、FIWC 関西（ワークの主体はおもに学生である）と交流の家との関係にはつきりできてきている。便宜上の定住者は必要であるが、彼等が決して交流の家の中心ではなく、それととりまくFIWC 関西委員会、宿泊者、地元の人々が交流の家が持つ内部への力がその持続を保証すると考える。そして結局もつとも重要な点は発想自体とそれを実現してゆくために、持続してゆくために必要な運動体自身の集団論であろう。集団論と運動論とを組みあわせることによって自分の運動の位置づけが可能である。

おわりに

FIWC 関西委員会に参加している私にとってFIWC 関西と交流の家の今後は重要な問題であった。今までの歴史を総括する必要に迫られたとき、自分の運動に対するあらゆる疑問が現場からの脱出という方向に於て解決されるのではないかと考えている。その意味で、FIWC の運動は状況運動に自ら反応できるものとしてあるだろう。私と同年輩の若い人達が一つの現体制を倒

さねばならないという考えを持つことは私とて同じである。だがあらゆる問題がそれを倒すことで解決するということには同意できない。"らい"は決して現体制を倒したからといって解決できない。それは自らの内部の問題であるから、FIWC が現場から脱出する方向を出しえたのは、まさにその集団論故であり、「方法論の中に目的が存在する」という集団に対する考え方故であったとおもう。「生産力理論型」「ユートピア型」という谷川雁の運動への接点を理解し実践することができるのはまさにこういう出発点にある。マルクス主義は未来社会を見 ワークキャンプは現実を見る。政治運動と社会運動との接点にこそあらゆる運動は形成されてゆかねばならない。社会運動の 立場から新しい方向を示す視点を考えてきた。

おわりに

参考文献

谷川雁全著作

今までに読んだ本全て